

3月9日(火)

Department of Pathology

佐藤直実

2日目はついについに最も見学したかった病理です。今日は加賀谷先生もいらして、一緒に病院へ。

病理を案内してくれたのは Dr. Lai でした。シンガポール人の方で、分かりやすい英語で話してくれてとても親切な人でした。まずは教授に御挨拶したのですが、教授は Dr. Tan で、なんと女性でした！しかも美人！日本にはあまり女性の教授はいないので、男性だろうという先入観でお会いしたのでとても驚きました。後で Dr. Lai に「教授が女性で驚いた」と言ったら、「シンガポールには女性の教授はたくさんたくさんいる」と言われました。「日本の教授は old man ばかりだね」、とも。。なぜ日本と諸外国はこの点では結構違うのでしょうか。このことはシンガポールに滞在している間、何度も考えさせられました。

次に案内してくれたのはレポート室。組織診断報告書を提出する部屋です。何と専門の秘書さんが6人くらいいて、サポート体制ばっちりでした。やはりこの部分もアメリカ式と言いますか、医者になるべく事務はさせないということを徹底しているのでしょうか。東北大にもそろそろメディカルクラーク制度が導入されていますが、そのうちこのようなきちんとした体制になるのでしょうか？





【レポート室の秘書さんたちと】

【シンガポールの病理のシステム】

続いて、シンガポールにおける病理医教育システムについて教えてもらいました。内科とは少し異なっており、3年の **Medical Officer** (これは同じ) を経て **Fellowship** になり、その後は2年の **Residency** を経て **Specialist** になるようです。Dr. Lai は **Consultant** の立場で、さらに **Senior consultant** が上にいるとか。また、病理部には **Surgical Pathology** (組織&細胞) と **Clinical Pathology** (要は検査部) があり、前まではさらに **Hematology** (FISH や染色体分析含む) があつたがそれは内科に統一され、**Autopsy** もあつたがそれは政府の施設に一本化されたということです。私の認識では、日本で病理と言えば **Surgical Pathology** であつて、病理医で **Clinical Pathologist** というのはあまり聞いたことがないです。検査部は検査部で独立しているし、さらに言えばウイルス学、寄生虫学などは基礎系で言えば微生物学分野、臨床で言うと感染症科で診ているのではないかと思うし…。この辺はみんな病理に含まれるみたいです。ただ、**Hematology** 関係が病理と臨床でフアジーなのは変わらないんだなーと思いました。

ここまでお話を伺ったところで館内見学へ。Pathology の建物はそれ自体が分離していて、かなり警備が厳重でした。PGMI の方の話では、「この分野はデリケートなものを扱っているから…」ということでしたが、Dr. Lai 的には「前 **SARS** があつたときに政府の通達でこの警備が厳重になってそれ以降なんだ。特にプライバシーとは関係ない」だとか。真実はどちらなのでしょう…。そしてこの建物、とても古いです。100年以上前のものだとかで、そろそろ新しい建物を建設中みたいです。「いつできるか分からない」と言っていました。まずは **Surgical Pathology** の Labo を見せてもらいました。基本的に、スライドの作り方は同じだと思います。Resident のみなさんが切り出しをやっていました。次に **Medical officer** の部屋に案内してもらいました。女性が一人いて、なんと同じ1年目の研修医だった！！大学も6年だし、同い年かも??でも、向こうは大学の最後の年にスーパーローテーション的なこと (**House officer** というみたいです) をすでにやっているのです、す

で彼女は臨床を終えて病理に進んだ存在であり、私より2年くらいのアドバンテージがあると思うと微妙に劣等感を感じました…。そして彼女は日本語もうまかった！中学の時に学んだことがあるんだって。英語も中国語も日本語も話せるのか…。というかなんで私は英語も話せないのか。逆に分かりません。凹む。

最後に **Clinical Pathology** のセクションとスライド保管室、レポート保管室、**Wet tissue** 保管室などを見せてもらい、隣の **National Heart Centre** へ。**Dr. Lai** は **Autopsy** と心臓病理の専門家みたいです。「心臓病理は日本では聞いたことがない、非常に珍しい」と言ったところ、「シンガポールでは自分ひとりだろう」と言っていました。なので心臓生検が予定されている時は必ず事前に連絡がくるみたいです（今日も金曜に2件ある旨きていました）。**NHC** には週に2回くらいカンファに訪れるみたいで、顔見知りの心外の先生などと会話をしていました。ここでは年間5-6件の心移植があるとか…。日本もそのくらいはやっているのか？東北大ではあまり聞いたことがないです。逆にスタンフォードに行った時はある日の病理標本がほとんど心移植後のフォローアップ生検だったことがあり、アメリカは面白いとその時思いました。シンガポールはそこまで大きくは違わない印象です。**NHC** でアイスチョコレートをお馳走になったのですが、その最中に「あれはこの国の厚生大臣だ」と **Dr. Lai** が言ったので驚いて振り向いたところ、小柄な男性が数人の男性に取り囲まれて歩いていました。びっくり。「よく来るのか」と聞いたら、すぐそばに厚生省があるみたいです。こんなところで要人の姿を見るとは…。



【Dr. Lai は心臓専門家】



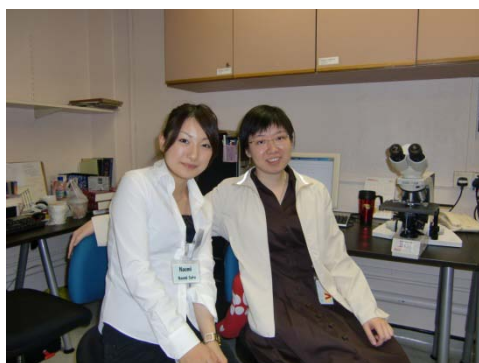
【National Heart Centre】

戻って再び教授室へ。今日、原田先生という方が日本医大から **SGH** を訪ねてきているらしく、会いに行くことになりました。原田先生は乳腺病理を専門にしている、同じく乳腺関係の **Dr. Tan** を頼って来たようです。ここで驚いたのは、二人とも森谷先生（現川崎医大教授で、以前東北大におり、私が3年生の時病理を指導して下さった先生。乳腺病理の権威と言われる方

です)の知り合いだったのでびっくりしました。特に **Dr. Tan** とは親しくて、森谷先生がまだ東北大にいた頃、仙台に来たことがあるとおっしゃっていました。原田先生は4月から1年間ここでフェローをやるとか。改めて留学へのあこがれが湧き上がってきました。

そして4人でランチに行くことに。近くのホテルのレストランで日替わりランチを頼みましたが、デザートの一つにドリアンが入っていて面白かったです。**Dr. Lai** はドリアンが嫌いなのか、事前に厨房に行ってよけてもらっていました…。

戻ってから、**Dr. Lai** が医学生にしている講義をしてくれました。まずはこの **Pathology** の紹介。検体は **SGH** だけでなく、**Heart Centre** や **Eye Centre**、**KKH**、**CGH** とか **Private Hospital** から来ること、去年の外科検体は4万件であることなど。次に一般的な病理の講義。**Dr. Lai** はシンガポール国立大学の他、**DUKE** と東洋医学系の大学にも講義に行っているみたいです。講義が一通り終了したところで解散となりました。



【Medical officer 室で】



【Dr. Lai、Dr. Tan、私、原田先生】

私はまだ病理で働いたことがないため、正直、日本とシンガポールとの違いということに関してはあまりよく分かりませんでした。ただ、最も深く感じたのは、こうして人と人とのつながりが生まれることの重要さです。私のかつての指導医の先生を御存じの方に2人も出会えたこと、今後も **Dr. Lai** とメールでやりとりをしていく約束をしたこと、原田先生という日本の **Dr** にもお会いできたこと、これらのことは、将来病理医を目指すうえで、今感じている以上にプラスになるのではないかと感じています。自分の今後の進路について、より深く考えることのできた一日となりました。